

ひょうたん島の歌

大塚喜子

闇の中でタミの耳が微かな音を聞いた。コツキ。

「何か聞こえた・・・何の音？」一郎が耳元で囁く。(コツキ)は一郎にも届いたのだ。

「ああ・・・折れたわ」

「折れたって？」

「骨よ。肋骨が・・・」一郎は弾ける様にタミから離れると

「骨の折れた音？まさか」

タミは目を閉じ、神経を研ぎ澄ませ、右手の指先で折れた肋骨の先端を確かめ、左手で明かりを点けようとする一郎を遮った。

肋骨の先端が細くて危ういことを一郎は知らないだろう。

「どうする？どうしよう？」一郎は遮二無二タオルケットを手繰り寄せ、タミの胸を覆った。

「どうしようもないわ。このままよ。何時もの事だもの・・・」

「医者に行かないの？」

「面倒だわ。昔折ったことがあるからわかるの」

「えっ？・・・やっぱりこうやっていて？」

「・・・夫を病院に連れて行こうとしていて・・・対向車を避けようとして・・・」

「タミさん。ゴメンね」

「心配しないで・・・貴方が謝ることないわ」一郎は少し安堵したのか、再びタミの傍らに寄り添った。

アパートの外階段を、ヒールの靴音が駆け上がった。いった。

三年前だった。駅の下りエスカレーターで不覚にも足を踏み外し、小脇に挟んでいた文庫(井上ひさし著『青葉繁れる』)を落とした。数段下にいた青年が、振りむいてキャッチすると

「僕もこの作家好きです」と言いながら手渡してくれた。一郎との縁が始まった瞬間だった。

一夜明けてタミは恐々自転車にまたがった。痛いと思つたのは腰掛ける時と漕ぎ出す時で、特別養護老人ホーム（朝日苑）の通用口まで来ると、痛みは粗方治まっていた。

ホームの調理室の朝は早い。朝が早いのは独り身にとって容易なことで、今朝もタミが一番の出勤だ。体を庇いながら白衣に着替え、入居者と職員合わせて百食の朝食の準備に取りかかる。今朝は晒で胸をグルグル巻いているから、動作が鈍い。

肋骨の先端が痛むから仕事を休もう・・・とは考えない。肋骨の先端が三本折れたあの時ですら、病院で応急処置を受け、姑が止めるのを聞かず、翌日も職場に行った。胸を晒で巻くのはその時に教えられた。

何事も、我慢して、頑張つてピンチを乗り越えようとするのは、物心ついた頃からのタミの生き方である。この痛みだつて半月もすれば収まるだろう。

六歳も若い男との逢瀬で、不覚にも再び骨を折つたタミを、亡夫はどんな目で見ていただろう。天国の隅で苦々しく睨んでいるかもしれない。病弱だった夫は「もしも、僕が先に死ぬことになったら、良い人を見つけて、再婚するんだよ。幸せになるんだよ・・・」と言つていたが。

出勤してくる人たちと、普段通りの挨拶を交わした。肋骨の痛みには耐えているとは、誰も気づくまい。

タミは四歳から児童養護施設「真鶴園」で育ち、高校を卒業して老人福祉施設の職員に採用された。家庭や家族・・・を実感することなく社会人になった。

結婚そのものが夢のような話だったのに、真鶴園の園長の紹介で知り合った十歳年上の吉田佳之と半年ばかりの交際の後に、結婚した。二十五歳の時だった。

婚姻の手続きをした役場の地下食堂の一隅で、園長と姑と四人で食事をして、二人はそのまま、箱根に行った。山間の露天風呂で岩に寄りかかかると、竹の壁を隔てた男湯から佳之の咳払いが聞こえた。気恥ずかしさと嬉しさがこみ上げて、手のひらで湯を掬って空を見上げた。自分は一人ではないと心底思った。

その通りで、翌日の夕餉の膳に姑が鯛を焼き、自慢の糠漬けをかき回す脇で、タミは茶わん蒸しを作った。テレビ画面でしか知らなかった家族の食卓を始め経験した。

「偉そうに、分かったようなことを言ってるけど、若い頃の佳之は我儘で、癪もちで、手が付けられなかったヨ」と姑が笑うと

「ソコまでバラスなよ！」と佳之が肩をすぼめた。

夫に先立たれ、一人息子の佳之を女手一つで育てた姑は、凜としても静か

な人だった。日々の三人の暮らしの中で、常識に欠けるところが沢山あったはずのタミに一言

「別嬪さんなんだから、眉間に皺をつくらないで、相手の目を見て、話しをしない」と言った。タミにそんな事を教えてくれる人は今までいなかった。

なのに、幸せな日々は三年間で終わった。佳之が職場で心臓発作を起こして一夜にして亡くなったのだ。

夫が亡くなった後の姑の憔悴は尋常ではなく、みるみる萎むように小さくなった。家族は姑だけになって、タミは懸命に支えたが、力及ばず、一年後に息子の後を追うように、亡くなった。再びタミは一人ぼっちになった。

「田舎のおふくろが、とうとう入院した。見舞いに行ってくる」

「それは心配ね。奥出雲は遠いから気をつけてね」

「なに、岡山までは新幹線だ。伯備線の特急に乗り継げば直ぐサ。僕の田舎へ行こうよ。おふくろに紹介したい。おふくろはタミさんに会えば元氣が出ること間違いなし。そうしようよ」一郎の目の色が変わり、タミを当惑させる。

お母さんは元氣が出るどころか、病状が悪化してしまうだろう。紹介され、いろいろ聞かれるのも困る。タミ自身が判らないことや、知らない事ばかりの過去のだから。その為に何度か嫌な思いをし、どれほど悔しさに唇をかんだことか。それを救ってくれたのが夫と姑だった。短い間の家族ではあったが、タミは充分すぎるほどの愛を知り、一生分の幸せを味わったとおもっている。自分はもう幸せは望まないと決めてもいるのに。

「タミさんは僕が嫌？年下の僕ではダメ？身分と収入の定まらないポストドク（ポスト・ドクター）の僕ではダメ……」一郎には若くて、相応しい人がいるはずだと思つて、返事をためらっているのに、食い下がってくる。

「僕は絶対に諦めないヨ。愛しているんだ。僕の愛は誰にも止められないよ……」平素と違う台詞を堂々という。タミの肩を抱きしめ、タミの胸に顔を埋めながら、自身のすべてを解放して語っている。タミは一郎に何を語ればいいのか。養護施設で育ったことと、三年間の結婚生活は話したが、一郎のように自分の全てを解放する言葉が見つからない。

東海道線根府川駅のホームに降りると、海の反対側の広い平坦な田んぼは、色とりどりの住宅に変わっている。風をきつて走り抜ける急行電車を見送って、山の中腹に建つ「真鶴園」を見据えながら、改札口を出た。

国道へ出る手前の道を左に折れると、新しく建て替わったビルの間に、見覚えのある耳鼻科医院がのこっていた。耳が痛い、歯が痛いと言いなら、学園の

先生に連れられて医院へ行く友達を皆が、羨ましがたものだ。タミも耳鼻科行きで、先生を独占した時の嬉しさを覚えている。

タミは黙々と歩いた。食堂が見えてきた。寮が見えてきた。朧気な記憶が鮮明によみがえる。

門を入り玄関に立った。駅舎も田んぼもあれほど変わったというのに、真鶴園の玄関先は何も変わっていない。あの頃と同じ色、匂い、空気を感じた。左手奥の階段の踊り場も変わっていない。

日曜日になると、誰かが会いに来てくれるかもしれない(お母さんだったり、お父さんだったり、親戚の人だったり)生徒らは期待と不安を押し隠しながら夫々に、あの踊り場から玄関を覗いていた。空振りだと判ると・・・鼻歌交じりで、階段を駆け上がる生徒等を、タミは羨ましかた。そんな時にそつと肩を抱いてくれたのが園長だった。

その園長に促されて入った食堂は、すっかり変わっていた。明るくて、広くて親しみ易くなっている。テーブルも椅子も立派で当時の片鱗もない。変わらないのは窓から見下ろす太平洋だ。水平線のかなたに影が見える。生徒は、競って船の影を探した。夕食後は、テレビの人形劇に見入って、歌いながら踊った。地平線上に浮かぶ船はどれも夢の島に見えた。

波をチャプチャプチャプくかきわけて

雲をスイスイスイく追い抜いて

ヒョウタン島は何処へ行く

ボクらを乗せてどこへ行く

丸い地球の水平線に

何かがきつと待っている

苦しいこともあるだろさ

悲しいこともあるだろさ

親はいらないくじけない

泣くのはイヤだく笑っちゃおう

ヒョッコリひょうたん島

ヒョッコリひょうたん島

(作詞 井上ひさし・山元護久)

タミが口ずさむと、園長がリズムを取った。タミは涙ぐみながら話し出した。

「あの日の朝、佳之と一緒に何時ものように家を出たの。登戸駅で佳之は上

り、タミは下り。二人は何時ものように「じゃあね！」と言って別れたの（じゃあね！）が二人の最後の言葉になってしまったわ」

園長はタミの手を取って一緒に泣いてくれた。

「本当にもう肋骨は治ったの」

「本当よ。少しも痛くないわ」

「触ってもいい」

「ダメよ」

一郎はダメと言われながらも手を伸ばして、恐る恐る肋骨に触れながら、タミの瞳に見入っている。タミは言葉で拒みつつも、なすがままに逆らうことはしない。

「僕たち今日は少し飲みすぎたね」互いに絡み合う足が熱っぽい。

「ごめんなさい。眠いわ」

「いいよ。夢でも見るといいよ」一郎の声を聞きながら、タミは沈み込むように眠りに落ちた。

タミはヒョッコリ・ひょうたん島に立っている。凧っている海の向こうの小舟の中に此方に背を向けた人影が見える。男なのか女なのかわからない。船が波をかき分けて近づいてきた。

（ああ・・・お義母さん・・・）タミの声に振り向いたのは佳之だった。

タミが差し出した手に佳之は応えようとしているのに船は遠のいた。

「船が・・・船が離れていくわ」

「船？夢を見ているんだね」一郎の声が聞こえたが、一郎と足を絡ませながらも、タミは佳之の面影を追った。

年末年始も黙々と働いた。独り身で何処へ行く当てもなく、誰も来る予定のないタミは、こういう時こそ出勤をかって出ることになっている。

一郎は家族そろって元旦の雑煮に箸をつけている事だろう。出雲の雑煮は丸餅で岩ノリが入るのだとか。出雲の岩のりをタミさんに食べさせたいと言っていた。一人で正月を過ごすタミを何度も何度も思いやってくれた。そんな心遣いだけでタミは充分嬉しかった。

「親にタミさんの事を話してくるからね」繰り返し言っていた。「引け目なんか感じることはないんだからね」と念をおしながら。

おふくろの具合が悪くなって予定通りに帰れなくなった・・・と夜遅く電話で知らせてきた。五分ほど話した後、一郎は（じゃあね）と言って静かに電

話を切った。(じゃあね)の一言がいつまでもタミの耳に残った。

一郎とはもうこれっきりになる……とタミは確信に近いものを感じた。何の理由もなくそう感じた。

「帰ったら一緒に初詣に行こうね」一郎は確かにそうも言った。

一人ぼっちには慣れている……まだ一郎との別れが決まったわけでもないのに、タミは別れに敏感になっている。一郎との出会いも、逢瀬も常に別れの予感が付きまとっていたような気がする。

元旦の夜は深々と冷える。寒さのせいで肋骨の先端が微かに疼く。

肋骨の先端を恐々なぞった一郎の指の優しい感触が蘇る。膝を抱えて眠りにつこうとすると、ベルが鳴った。一郎に違いない。ベルの音に重なって佳之の声が聞こえる。

「サア幸せになるんだよ……」タミは電話の呼び出し音を遠くに聞きながら、佳之の背中を追った。

終わり